

旧約聖書 ヨエル書 3章 1節 - 5節

新約聖書 使徒言行録 2章 22節 - 28節

選句「しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、
復活させられました」(2:24)

- 1、全国高校野球大会の第12日(8/21)花巻東と明豊の試合で、花巻の投手菊池がアキシデントで降板、3点も逆転を許した。「逆転もあり」だが、花巻はピンチをチャンスに変えて勝ちを得た。確信の運びをたどった。「全員で勝利」とは新聞評。
- 2、「使徒言行録」の2章は「聖霊の降臨(1-13)」で始まる。聖霊降臨日の箇所なので今回は先に進む。次の「ペトロの説教」(2:14-41)は三つに分けられる。冒頭(14-21)は「多言の奇跡」を「新酒に酔っているのだ」とあざける人達への弁明。その先の(22-28)説教の中ほどは、「イエスとは誰か」を述べる。
- 3、この説教全体は著者の構成によるものである。全体は神が主語である。ルカの神学では、イエスは神の器に過ぎない。イエスの十字架については「このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて十字架につけて殺してしまっただけです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放し復活させられました」(23-24)。一カ所だけ「あなたがたは・・・十字架につけて殺してしまっただけ」とユダヤ人が主語になっている。ここが「逆転もあり」というところである。しかしこの逆転もルカの救済史では「ユダヤ人によるイエスの殺害は、神の救済史の一段階として予め定められてあったというルカの十字架理解が表明されていることになる」(荒井献『使徒行伝上』p.152)と言われる。「イエスの死を人間の罪の赦しとみなす、パウロからエルサレム教団に遡るであろう『贖罪死観』はルカ文書には全体として欠落しているのである」(荒井p.152)。「<イエスが甦った>(アナステイナイ)という告白定式は<神がイエスを起こした>(エゲイレイン)という告白定式より新しく、アナステイナイを<起こした>と同様の意味に、すなわち<甦らせた>の意味に用いているのは、新約の中でルカ文書に限られている」(荒井p.152)。この復活理解はルカ特有のものである(前出p.153)。
- 4、神が遣わしたイエスを殺す社会の現実はある。それが現実だと言えよ。しかし、神がイエスを蘇らせる、この出来事への揺るぎない信仰がルカにはある。殺人の現実で、「命」を信じて歩み続ける。ルカは25節以下で詩編16:1-8を「命にいたる道をわたしに示し、・・・喜びで満たしてください」と引用する。
- 5、NHK番組「日本の、これから」を見た(8/15)。テーマ、核廃絶は可能か。「抑止力」を主張する人々は意外に多い。現実主義者である。アメリカの核の傘を肯定し、核武装が現実的だと主張し、「廃絶」は空論だという。核は「殺す」論理だ。歴史の局面では「逆転もあり」で現実論が強そうだが、命の確かさは変わらない。核問題では「廃絶しかない」とわたしも叫びをあげてきた。ルカの神学がユダヤ人の「人殺し(罪)の現実」への「逆転」も認めつつ、なおぶれないのがよい。